

〈原著〉

特別支援学級における学生ボランティア導入に関する調査研究 (3)

今 野 邦 彦 (藤女子大学 人間生活学部 保育学科)

藤女子大学人間生活学部保育学科が実施している石狩市立小中学校の特別支援学級での学生ボランティア活動の単位化について、学生、ボランティア受け入れ校、大学の三者の立場から検討した。

新たに可能となったボランティア活動による単位取得をした学生は15名であり、その全員が単位履修をして「よかった」と回答した。理由として、計画書や最終レポートの提出により活動の目標や結果を強く意識できたこと、責任感・自覚を持って活動に臨めたということなどが挙げられた。

一方、単位履修登録をしなかった学生の回答には、本人の動機づけに関わる理由もあったが、授業時間割、履修登録の上限の制限などの理由も挙げられた。

またボランティア受け入れ校への調査では、単位化の賛否について一定の傾向が見られなかった。一般的に単位化は学生の意欲・責任感の向上につながると考えられるが、逆の場合も考えられることや、学校側の負担増になる懸念も示された。

大学側からみたボランティア活動の単位化については、単位取得の義務化は却って弊害をもたらす可能性があり希望者による単位取得が望ましいこと、「学校インターンシップ」「サービスマーケティング」という視点を取り入れることが活動の充実につながることが示唆された。

キーワード：特別支援教育、特別支援学級、学生ボランティア、単位化

1. はじめに

藤女子大学人間生活学部保育学科（以下、本学科とする）では、2014年度から石狩市の小中学校特別支援学級の協力を仰ぎ、ボランティア活動を推進している。

今野¹⁾²⁾は2014・2015年度の2年間の活動を振り返り、派遣先の学校の教員から見た成果として、児童生徒の遊び・集団参加の促進、授業態度・情緒の安定といった回答や、「ボランティア学生が学級に入ることにより、普段よりもきめ細かい対応や指導ができる」などのコメントを得た。一方、小中学校の教員からは「ボランティア活動中や行き帰りの事故が心配」という声や、打ち合わせ・連携などの体制整備、人員配置に関する課題も挙げられた。また学生側から見て、特別支援学級の教育内容の理解や児童・教員との関わりにおける成果や、児童生徒との関わりにおける悩み、交通手段・交通費の保障などの課題があることを明らかにした。また、大学の年度による時間割変更等の理由により、ボランティア活動に参加可能な学生数が年

によって大幅に増減するという事情に鑑み、ボランティア活動を単位化する可能性を示唆した。

また今野ら³⁾は、教育実習の事前指導として実施しているボランティア活動の観点から、教育実習前後の指導をより充実させ、学生が不安を軽減して自信を持って教育実習に臨むための方策として、ボランティア活動の単位化について言及している。

そこで本稿では、本学科での特別支援学級ボランティア活動とその単位化について検討することを目的とする。

2. ボランティア活動の単位化

本学科での特別支援学級ボランティア活動には、二つの側面がある。

第一は、将来、幼稚園教諭・保育士を目指している学生にとって必要と考えられる、障害のある子どもの理解、特別支援教育に対する理解を深めることである。

第二は、本学科で所定の単位を収め教育実習を履修

することで可能となる特別支援学校教諭免許状取得の履修条件としての位置づけである。本学科では、4 年次での特別支援学校での教育実習を希望する場合、3 年次の秋までに、特別支援学校または特別支援学級で 5 回以上のボランティアを経験することを条件としている。

特別支援学校と特別支援学級のどちらでボランティア活動に参加するか、あるいは両方に参加するかは学生の自由だが、特別支援学校でのボランティア活動は学校行事の補助などが中心の単発のものが多くにに対し、特別支援学級でのボランティア活動では、毎週 1 回 3 時間程度の活動を数回（学生によって一期につき 4～11 回）行っている。この継続的な活動により、学生と児童生徒との距離が縮まり、ボランティア参加者は子どもの成長・変化を実感することができる。先述の研究でも特別支援学校のボランティアに参加した学生からは「1 日だけのボランティアでは学べることが少なく、子どものこともよくわからずに終わる」「子どもと関わるのが少ないと、あまり役に立たない」といった課題が指摘されていた。一方、特別支援学級に継続的に通った学生からは「長期間関わることで、子どもと仲良くなれたし、先生方からも多くの話を聞くことができた」「毎週通うことで、子どもの成長を見ることができた」「普段の授業の様子を間近で見ることができ、大学の授業で学んだことについて理解が深められた」などの成果が挙げられた。このため筆者は、可能であれば後者の特別支援学級ボランティアに参加することを推奨している。

しかし前述のとおり、大学の授業時間割等の制限があり、この継続型のボランティア活動への参加を躊躇する学生も少なくない。

そこで前述のとおり、今野²⁾が 2015 年度のボラン

ティア活動参加者に対し「このボランティア活動で単位が取得できるとしたら、取得したいか」について調査したところ、結果は 23 名中、単位として取りたい 14 名、単位としては取りたくない 2 名、どちらともいえない 7 名であった。単位化すると必然的に小中学校と大学間の条件設定や学生の関わり方についてもやり取りが増え、活動内容が整備されてさらなる充実を図ることが期待できることから、希望者について単位取得の道を拓くことが、本事業の充実発展につながることを示唆した。

この結果を受け、2016 年度は、本学の授業科目である「ボランティア活動」「個別課題演習」の単位認定対象ボランティア活動として、この特別支援学級ボランティア活動を位置づけ、単位取得（1 または 2 単位）を可能とした。

この両科目は、実際のボランティア活動への参加や学生による主体的な取り組みに対し、教育的意義が認められ所定の条件を満たす場合に単位を認定するものである。具体的には、実際の計画的なボランティア活動の他に、計画書、実施記録、活動報告書の提出を義務付け、これが認められた場合に単位が取得できるというものである。

2016 年度は、ボランティア参加者募集と並行して、このボランティア活動がこれらの科目の単位認定対象となったことを告知した。その結果、両科目で計 17 名の単位取得希望者があった。これが奏功したのか、2015 年度に大幅減となったボランティア参加者数は回復傾向を示した（図 1）。

ただし、この人数増について単位取得がどの程度影響しているか直接はわからない。そこで本稿では、この「ボランティア活動の単位化」について、学生側と受け入れ校側の意識を調査し、検討することとした。

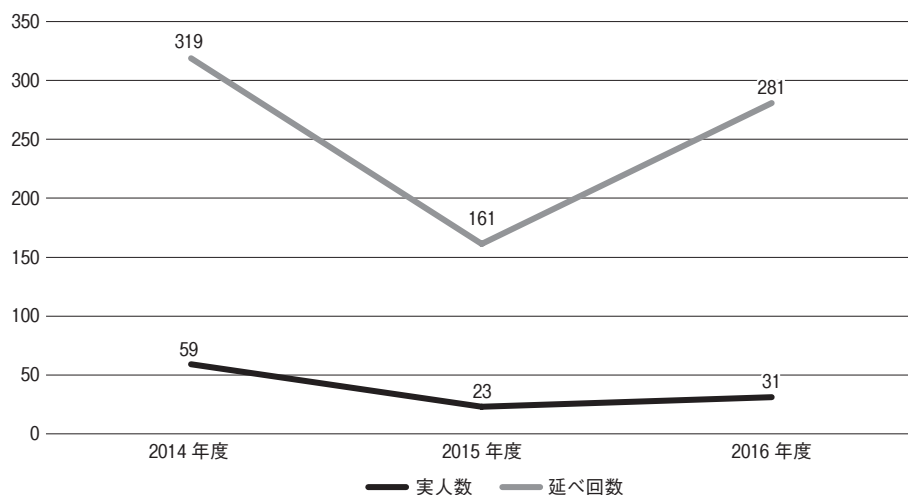


図 1 特別支援学級ボランティアの実人数・延べ回数の推移

3. 調査 I ～ボランティア参加学生対象

(1) 目的

特別支援学級ボランティア活動に参加した学生のうち、単位履修をした学生と、しなかった学生の意識の違いを明らかにする。

(2) 方法

2016 年度の特別支援学級ボランティア活動に参加した学生を対象として、年度末に質問紙調査（無記名）を行った。

まず今回のボランティア活動で単位履修登録をしたかどうかを質問し、登録をした学生には「ボランティア活動で単位がとれてよかったと思うか」、登録をしなかった学生には「なぜ登録をしなかったのか」「登録をしなかったことについて、現在はどう思っているか」を尋ねた。また特別支援学級ボランティア活動に参加した学生全員に「今後の学生について、特別支援学校教諭免許状取得の条件として、ボランティア活動に参加して単位を取ることを義務付ける」ことについて、どう思うかを質問した。

(3) 結果と考察

ボランティア活動に参加した学生 31 名全員から回答があった。

1) 単位履修登録の有無

2016 年度の特別支援学級ボランティア活動について単位履修登録（前述の「ボランティア活動」または「個別課題演習」）をしたかどうかについての回答は表

表 1 単位履修登録の有無

	回答数
単位履修登録をした	17
単位履修登録をしなかった	14

1 のとおりであった。

2) 単位履修登録をした学生の回答

単位履修登録をした 17 名について、単位履修を登録してどう思ったかを質問した回答が表 2 である。また理由についての自由記述の内容は表 3 のとおりであった。

今回単位履修登録をした学生は 17 名だったが、書類の不備などにより条件を満たすことができない学生が 2 名いたため、実際に単位を取得した学生は計 15 名であった。したがって、単位取得をした学生 15 名全員が単位履修をして「よかった」と回答したと考えられる。

自由記述でも「計画書や最終レポートを書かなければいけなかったのも、必然的に目標を立て、意識したり自分のやったことや想いをまとめることができた」「授業の一つとして行けたことで、責任感や自覚を持って行くことができた」と、授業の一環であることを積極的に受け止めた回答が見られた。

このことから、単位取得をした学生の中には、単に教育実習の履修条件に必要な回数を満たすだけでなく、ボランティア活動に参加することによってより前向きに活動することができた学生がいたという効果が認められてた。

3) 単位履修登録をしなかった学生の回答

単位履修登録をしなかった 14 名について、その理由を質問した回答が表 4 である。

また、単位取得をしなかったことについての感想とその理由を表 5 表 6 に示す。

履修登録をしなかった理由は様々だが、「期間内の

表 2 単位履修登録をした結果について

	回答数
よかった	15
よくなかった	0
どちらともいえない	2

表 3 単位取得をした結果についての回答理由（自由記述から抜粋）

よかった

- ・計画書や最終レポートを書かなければいけなかったのも、必然的に目標を立てて意識したり、自分のやったことや想いをまとめることができたから。
- ・自分で行く場合は、予定ができたり甘えが生じて行かない可能性もあるが、授業の一つとして行けたことで、責任感や自覚を持って行くことができたから。
- ・頑張ったことが単位になるのでうれしいから。
- ・特別支援学校教諭免許状取得のためのボランティアにも関係していたし、それに加えて単位も取得でき、現場で経験も積めて一石三鳥だったので良かった。
- ・特別支援学校教諭免許状取得の条件も満たされ、単位も取れたから。
- ・とても良い経験ができた上に単位が取れたから。
- ・ボランティア活動が単位という形で評価されるから。

どちらともいえない

- ・報告書を出し忘れて単位が取れなかったため。しかし、特別支援学級に行くことができてよかったと感じているから。

表 4 単位履修登録をしなかった理由についての回答理由
(自由記述から抜粋)

時間割の制限	
・期間内の取得単位の上限を超えてしまうため。	
・時間割の都合。	
・時間割に十分空き時間がなかったため。	
単位が目的ではない	
・単位取得を目的としてボランティアをしているわけではないから。	
・単位の取得には興味がなかったから。	
・単位を取得しなくても、卒業単位が足りると思ったから。	
その他	
・レポート提出が面倒くさかったから。	
・時間がなくて十分な回数ができないと思ったから	

表 5 単位取得をしなかった結果について

	回答数
よかった	2
よくなかった(履修した方がよかった)	2
どちらともいえない	9
無回答	1

表 6 単位取得をしなかった結果についての回答の理由
(自由記述から抜粋)

よかった	
・十分な回数行くことができなかったから。	
・レポートを書くのが大変そうだったから。	
よくなかった	
・単位取得しなかった。	
・(単位取得したら)授業の空いている時間などを有効に使えたから。	
どちらともいえない	
・ボランティア自体は毎回内容の濃いものであったで、単位としての重みはあったかもしれないが、単位がとれなくても良いと思ったから。	
・単位取得を目的としてボランティアをしているわけではないから。	
・単位が取得できるにしろできないにしろ、行っていたと思うので。	
・単位は取れなくても、行けて良かったから。	
・単位はもらいたいが、授業が重なっているので仕方ないと思う。	
・(上限がなくて)登録ができたのなら単位取得したかった。	

取得単位の上限を超えてしまうため」という条件的な制約によるものに加え、「単位取得を目的としてボランティアをしているわけではないから」「レポート提出が大変そうだったから」という回答も見られた。

単位履修をしなかった結果についての記述は理由によって様々だが、実際には履修登録をしなかったが、後から考えると「履修登録した方がよかった」という回答も見られた。

4) 単位履修の義務付けについて

「今後の学生について、特別支援学校教諭免許状取得の条件として、ボランティアに参加して単位を取ることを義務付ける」ことについての賛否を質問した結果とその理由の自由記述が表 7 表 8 である。

義務付けについては回答者の約 8 割が賛成であった。ただし自由記述を見る限り「ボランティアの義務付け」に関する回答が多く「単位取得の義務付け」についての回答は少なかった。

そのような中でも「実際に現場を経験する点、取得にある程度の条件をつける点、本当にやりたいと思う人が取り組むことになると思うので良いと思う」と義務化を積極的に捉えている学生がいる一方、「義務付けをしなくても高い意識がある人は積極的にボランティアに行くと思う」と、義務化を疑問視する回答も見られた。

この結果と先述の「履修登録をしなかった」理由から、ボランティア活動自体の義務付けには賛成意見が大半だが、単位取得までを義務付けると、履修上の様々な制限の影響が大きいことが示唆される。

表 7 単位履修の義務付けについて

	回答数
賛成	24
反対	1
どちらともいえない	6

表 8 単位履修の義務付けについての回答理由(自由記述から抜粋)

賛成	
・実際に現場を経験する点、取得にある程度の条件をつける点、本当にやりたいと思う人が取り組むことになると思うので良いと思う。	
・特別支援学校教諭免許状を取得できる人数が限られる場合、何かしらで決めなければいけないと思うので。	
・一定の回数以上と決まっているからこそ、色々な場所で様々な環境や子どもたちとふれ合うことができると思うから。	
・たくさん行って、障害児とふれ合った方がいいから。	
反対	
・やり方は賛成だが、回数が多い。	
どちらともいえない	
・義務付けをしなくても高い意識がある人は積極的にボランティアに行くと思うから。	
・単位がほしい人とそうでない人がいるから。	

4. 調査Ⅱ～ボランティア受け入れ校対象

(1) 目的

学生ボランティア派遣先の学校における、ボランティア参加学生の単位取得の義務付けについて、意向を調査する。

(2) 方法

2016年度の特別支援学級学生ボランティアを受け入れた学校に対し、年度末に質問紙調査を行った。

調査は、「特別支援学級ボランティアに参加する場合には、単位取得を義務付けること」について、選択肢と自由記述で回答を求めた。

(3) 結果と考察

ボランティア活動を受け入れた学校6校の担当者計7名から回答があった。

単位化の賛否とその理由についての回答結果を表9表10に示す。なお表10内の丸数字は表9内の数字と対応している。

回答数が少ないうえ、単位化の賛否については一定の傾向は見られず、その理由も表10のとおり様々であった。一般的に単位化は学生の意欲・責任感の向上につながると考えられるが、逆の場合も考えられることや、学校側の負担増になる懸念も示され、課題が提示されることとなった。

5. まとめと今後の課題

松田⁴⁾によると、日本教育大学協会の会員大学で、学生のボランティア活動に対して教育課程内(単位を与える活動)としての教育プログラムが「ある」と回答した大学は54%(30校)、「現在検討している」が5%(3校)、「ない」が41%(23校)であった。また、教育課程外(単位を与えない活動)としての教育プログラムについては、「ある」が71%(40校)、「ない」が25%(14校)であった。

このような状況を踏まえ、高田⁵⁾は「学校現場、教員養成、学生の三者の相互性を教育力の向上に変換できるボランティア活動」の重要性を述べている。本研究でも、学生、ボランティア受け入れ校、大学の三者の立場から、特別支援学級ボランティアの単位化について検討する。

調査Ⅰのとおり、今回のボランティア活動により単位取得をした学生は15名であり、その全員が単位履修をして「よかった」と答えている。その理由の中で、単位を取得した者と取得しなかった者の意識の違いで

表9 単位化の賛否

	回答数
①賛成	3
②反対	1
③どちらともいえない	3

表10 単位化の賛否に関する自由記述(抜粋)

- ①学生の意欲が高まるから、
- ①責任感が強くなる。
- ①学生の参加意欲が高まると思うので賛成。
- ②出席管理や評価等、インターンシップで学生(他大学)を受け入れた経験から想像する限り、事務手続きを含め、業務が多くなることが考えられるため。
- ③単位獲得目的で子どもが嫌いな人が来たりしないか心配。

最も特徴的なことは、計画書や最終レポートの提出により活動の目標や結果を強く意識できたことや、責任感・自覚を持って活動に臨めたということであろう。

本学科のボランティア活動では、単位履修登録をしなくても、毎回の活動参加後に簡易な報告書(A5版1枚)の提出を義務付けている。これにより本学科では、ボランティアの活動時間・内容、学生の感想や課題などを把握しているのだが、今回の単位履修にあたってはより計画的・総括的な報告を求めた。これが結果として学生の意欲向上につながったと考えられる。

一方、単位履修登録をしなかった学生の回答には、「単位取得を目的としてボランティアをしているわけではない」「レポート提出が大変」といった本人の動機づけに関わる理由もあったが、授業時間割、履修登録の上限の制限などを理由に登録しなかった学生も見られた。また単位履修の義務付けについては、肯定的な回答だけではなく、否定的な意見も見られた。

本学科では資格取得のための必修科目が多く、特に下位学年の学生では時間割の余裕が少ない、その中で学外でのボランティア活動による単位取得を義務付けることには相当な制限が予想される。岩田⁶⁾が述べているように、一週のうちある曜日の全日または半日、必修科目をはずすという配慮をするなど、学生がボランティア活動を円滑におこなうための時間の確保をすることが課題として挙げられる。

調査Ⅱでは、ボランティア受け入れ校の教員の意向を調査した。この調査では回答数が少なく賛否の傾向を判断しがたいが、吉岡⁷⁾が学生ボランティア派遣校12校から回答を得た調査では、「(ボランティア活動を)単位化する必要があると思われますか?」という質問に対し、「とても思う」33%、「やや思う」42%、

「あまり思わない」17%、「全く思わない」8%という結果であった。「必要がない」と答えた理由の中には、「単位目的でやる気のない学生が来る」「教育実習だけで充分だから」というものがあった。調査Ⅱの回答にも同様の内容が見られることから、受け入れ校側には、単位化が必ずしも学生全員の意欲の向上は繋がらないという危惧が存在することが示唆される。

以上を踏まえて、大学側からみたボランティア活動の単位化について考える。平館ら⁸⁾はボランティア活動の単位化について、参加の動機が単位の強制であっても実際に参加することで、取り組む姿勢が良い方向へ変わってくることが往々にしてあると述べる一方、「活動を卒業要件に含まれる単位として認定するとなれば、単位不足で進級・卒業の危うい学生が、単位ほしさに活動に参加する場合も想定される」として、「取り組む姿勢の変化」が期待できずに派遣先の学校への迷惑となる可能性を指摘している。このことから、ボランティア活動の強制化は却って弊害をもたらす可能性がある。

森下⁹⁾は、A 大学でボランティア活動を卒業要件に直接関係しない自由選択の科目として単位化したところ、学生の活動量を一定以上確保し地域の学校に対する支援の効果を向上させる効果があったこと、特に単位化によって参加学生数が大幅に増加したこと、一方で、学習環境のデザイン上、学生の学校支援ボランティアという活動形態から自主性を一部削ぐものとなっていたこと、を報告している。これは今回の本学科のボランティア単位化と共通した状況であり、今後の本学科のボランティアの在り方にとって参考となる報告である。

森下の報告では、ボランティア事業の単位化が、学校現場のニーズに沿った活動形態を見直す契機になったと述べている。すなわち、「学校支援ボランティア」は、活動の自主性や自由度が高く、学校現場に対する短期的な支援に適しており、「学校インターンシップ」は活動の質や量が一定以上確保され、子どもたちの授業中の学習支援や生活支援といった中長期的な支援に適しており、「サービスマーケティング」は、サービスを提供する側とされる側の互恵関係が組織化されるため、学校現場のニーズに沿った活動と学生の求める学習経験を可能にするものである。

このことから、本学科における特別支援学級ボランティア活動は今後、「学校インターンシップ」または「サービスマーケティング」という視点を持って取り組む必要があると考えられる。しかしそのためには、受け入れ校や教育委員会、また本学の他学科で行われているボランティア活動との連絡・協議・調整が必要になることが考えられ、このような組織的な取り組みが実現することにより、学生、学校（児童生徒、教職員）、大学のいずれにとっても有効な活動の保障につながると思われる。

文献

- 1) 今野邦彦：特別支援学級における学生ボランティア導入に関する調査研究(1)、藤女子大学 QOL 研究所紀要(10), pp 55-60, 2015.
- 2) 今野邦彦：特別支援学級における学生ボランティア導入に関する調査研究(2)、藤女子大学 QOL 研究所紀要(11), pp 17-23, 2016.
- 3) 今野邦彦・池田浩明・小川透：特別支援学校の教育実習における学生の意識について(3)—教育実習生へのアンケート調査から—、藤女子大学人間生活学部紀要(54), pp 97-103, 2017.
- 4) 松田恵示：ボランティアに関する取り組みについてのアンケート調査、ボランティアと教育に関する諸問題と教育系大学・学部での取り組みについて、日本教育大学協会学校外ボランティアの質的向上検討プロジェクト, 2008.
- 5) 高田恵美子：本学科学生のボランティア活動に関する一考察—ボランティアの自主性と教育的効果—、関西女子短期大学紀要(22), pp 1-11, 2012.
- 6) 岩田吉生ほか：HATO プロジェクト構成大学における特別支援教育の学校支援ボランティアの実態、障害者教育・福祉学研究(12), pp 179-183, 2016.
- 7) 吉岡恒生ほか：発達障害児のための学校支援ボランティア事業(3)—3 年間で振り返って—、愛知教育大学研究報告(59), pp 29-37, 2010.
- 8) 平館善明・三原好生：スタディーサポートサークルにおける学校支援ボランティアの成果と課題：学校支援地域本部事業との関わりから、帯広畜産大学学術研究報告(31), pp 72-82, 2010.
- 9) 森下覚：大学と教育委員会による学校インターンシップの構築と変遷、大分大学教育福祉科学部研究紀要(37), pp 287-300, 2015.

Research about the student volunteer in special needs class (3)

Kunihiko KONNO

(Fuji Women's University, Faculty of Human Life Sciences, Department of Early Childhood Care & Education)